『古代アメリカ』14, 2011, pp.111-122

＜調査研究速報＞

# ペルー共和国アンコンにおける文化財事業 2009－2011：アンコン考古学調査センターの実践

ルシア・ワトソン・ヒメネス
(アンコン考古学調査センター)
市木尚利
(アンコン考古学調査センター)

## 1. はじめに

中央アンデス地帯での文化財事業の主体のひとつに地方博物館がある。地方の文化財とその歴史・文化的価値を発信しながら、専門家や市民との交流を促進する主体である。ペルー共和国アンコン遺跡博物館（図１）は、そういった地方博物館の一つである。この博物館には、アンコン考古学調査センターが設置されている。2009 年以降、アンコン考古学調査センターは、デジタルカタログの作成及びホームページでの公開、子ども考古学教室、フィールド・スクール[註1]を実施してきた。本稿では、アンコン考古学調査センターの事業と役割について報告する。

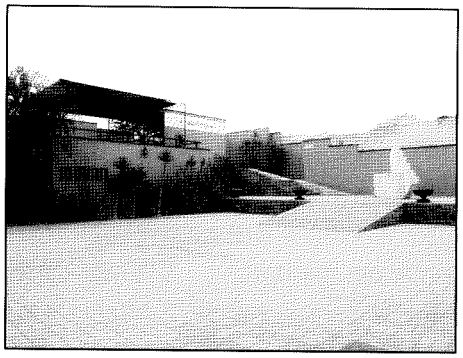

**図１　アンコン遺跡博物館の概観**

## 2. アンコンについて

アンコンは、ペルー共和国リマ県リマ郡に属する行政区で、リマ市から北へ 43km の所、東経 77º00´12´´ － 77º12´04”、南緯 11º34´21´´ －11º49´30´´の海岸部に位置している（図 2)。年間の降水量は 150mm 程度で、砂漠が広がっている。相対湿度は 70%以上と高いが、アンデス山脈西斜面から海岸部にかけての特有な地理条件のため雲が形成されにくく、降雨は年に数度である。しかし、アンコンの沿岸部では、6 月以降に霧が頻繁に発生するため、8 月から 9 月にかけて、砂漠に草花が繁茂するロマス現象がみられる。

アンコンの面積は、298.64k $m^2$であり、首都リマ市内でもっとも大きな区となっている。夏の避暑地、また漁民の町として知られる。しかし、その市街は区全面積の 2.7%ほどで、あとは軍の所有地

である。都市発展のために、軍用地の縮小を求められることがある。

このアンコンに、先スペイン期の遺跡が数多く分布し、考古学の調査・研究にとって非常に重要な地域となっている。

図２　アンコンの位置

## 3. アンコンでの考古学研究史

19 世紀後半に始まった、リマーチャンカイ間の鉄道建設を契機に、アンコンで多くの遺跡や遺物が発見され［Rosas 2007: 39］、研究者たちが考古学調査を開始した。

アンコンで最初の学術的発掘調査は、ヴィルヘルム・ライス（Wilhelm Reiss）とアルフォンス・ストゥーベル（Alphons Stübel）によって、1874 年から翌年まで行われた。彼らの発掘調査の成果は、三巻におよぶ、カラー図版付きの報告書にまとめられた[Reiss and Stübel 1880-87]。しかし、ライスとストゥーベルは、発掘した遺構・遺物の総数及び編年的位置などを明らかにしなかった。1876 年に、チャールズ・ワイナー（Charles Wiener）が幾つかの墓を調査したが、その成果は報告されていない。発掘で出土した遺物は、パリ人類博物館の財団に引き取られた。1884 年には、クヌー・ハルマー・ストルプ（Knut Hjalmar Stolpe）が発掘調査を行った。出土遺物は、スウェーデンの首都ストックホルムにある国立民族博物館に保管されているが、彼が残した野外調査ノートは失われた。1891 年から翌年にかけて、ジョージ・アモス・ドルシー（George Amos Dorsey）が、シカゴで行われた世界コロンビア展の協力のもと、発掘調査を実施し、127 基の墓を発見した。この調査で出土した遺物の分析に基づき、ドルシーは 1894 年に博士論文「ペルー、アンコンのネクロポリス遺跡における 100 基以上の墓群調査に基づく考古学研究（An archaeological study based on a personal exploration of over one hundred graves at the necropolis of Ancón, Perú）」を執筆したが[Dorsey 1894]、野外調査ノートは紛失した。

1904 年に、ドイツ人のマックス・ウーレ（Max Uhle）が先土器期の貝塚で発掘調査を行った。ウーレは、アンコンにおける文明形成以前の人々を「原始的漁民」と呼称した[Uhle 1913]。またウィリアム・ D・ストロング（Willam D. Strong）は、ウーレの未発表の野外調査ノートに従って土器の出土状況を分析し、編年試案を提示した[Strong 1925]。1941 年には、ゴードン・R・ウィリー（Gordon R. Willey）と M・ニューマン（M. Newman）が発掘調査を行い、その成果に基づいて土器編年を確立した[Willey 1943, 1948]。

1945 年末には、アンコンにおける新興住宅の建設が原因となって、考古学緊急調査が大規模に始められた。フリオ・C・テーヨ（Julio C. Tello）たちが、2000m×200m の範囲で発掘調査を行い、約 14100 点の遺物と 1570 基の墓を発見した。1946 年以降、病床にあったテーヨに代わり、レベッカ・カリオン=カチョット（Rebeca Carrión Cachot）が現場での指揮をとった。そして、形成期に属する

約 260 基の墓を発見した。この発掘調査の成果に基づいて、カリオン=カチョットは、アンコンをチャビン文化の植民地として解釈した[Carrión Cachot 1948]。さらに、彼女は、1951 年にペルー国立サン・マルコス大学で開催されたアンコン古代文化の展示会にあわせて、文化的変遷を紹介する小冊子を出版した[Carrión Cachot 1951]。シリロ・ワパヤ（Cirilo Huapaya）も墓群調査に基づいて 1948 年に論文を発表し、埋葬や土器の変化の概要をまとめた[Huapaya 1948]。

1947 年 6 月のテーヨ死後も、サン・マルコス大学の考古学者たちは、発掘調査を継続した。1950 年 8 月から 3 年の間に、875 基の墓が発掘され、約 11100 点にも及ぶ遺物が出土した。1955 年以降も断続的に発掘調査は行われた。

1950 年代には、アンコン沿岸部における前期中間期や中期ホライズンの遺跡・遺物に関する調査が実施され [Tabío 1957, Stumer 1953, Bonavia 1962, Patterson 1966] 、また周辺に分布する、様々な時期の遺跡についても調査が行われた [Stumer 1954a, 1954b, 1955, 1961]。

1950 年代末から 1960 年代には、アンコンとその周辺における先土器期（古期）及び形成期の遺跡調査が盛んになる。1959 年から 1962 年まで断続的ではあるが、ペルー国立人類学考古学博物館の考古学者たちが、先土器期や形成期の遺跡を発掘した。ホルヘ・C・ムエジェ（Jorge C.Muelle）とロジャー・ラビーネス（Rogger Ravines）が、1974 年に、先土器期の層位と遺物についてまとめた論文「アンコン先土器期の層位について（Los Estratos Precerámicos de Ancón）」を発表した[Muelle and Ravines 1974]。ラミロ・マトス（Ramiro Matos）は、博士論文「アンコン早期の土器とその問題点（La Cerámica Temprana de Ancón y sus problemas）」を執筆した[Matos 1962]。マトスは、1966 年にペルー中央海岸部における早期の土器に関する報告を行った[Matos 1966]。1961 年から 1963 年、そして 1967 年には、エルミリオ・ロサス・ラ・ノイレ（Hermilio Rosas La Noire）が発掘調査を実施した。ロサスは、この調査成果を、1970 年の学士論文「アンコン形成期の文化的変遷について（La Secuencia Cultural del Periodo Formativo de Ancón）」にまとめ、2007 年に出版した[Rosas 2007]。

また、マイケル・モーズリー（Michael Moseley）は、1968 年の博士論文においてアンコンで出土した先土器期の遺物についてまとめた[Moseley 1968]。モーズリーは、アンコンからリマの海岸部での調査成果に基づいて、1975 年に『アンデス文明における海産資源について（*The Maritime Foudations of Andean Civilization*）』を著した[Moseley 1975]。アンデス文明の形成や発展を支える経済基盤について農耕だけに焦点をあてていた研究を批判し、海産資源がアンデス文明の形成に果たした役割の大きさについて論を展開した。アンコン周辺の先土器期については、エドワード・ラニング（Edward Lanning）[Lanning 1963, 1964, 1967]やロサ・フン（Rosa Fung）他[Fung et al. 1972]による調査報告がある。

パターソンとラニングは、1950 年代から 1960 年代初頭までの、アンコンとその周辺の海岸部における調査成果に基づいて、一種の地域史ともいえるような歴史の復元を試みた[Patterson and Lanning 1964]。彼らは、先土器期から 1950 年代までのペルー中央海岸部におけるセトルメント・パターンの変化を見い出した。

1966 年に、イルダ・ビダル（Hilda Vidal）とカルロス・グスマン・ラドロン・デ・ゲバラ（Carlos Guzmán Ladrón de Guevara）は、後期中間期の墓を約 90 基発見した。1968 年から翌年まで、ビダルは継続して発掘調査を行った。彼女は、後述するアンコン遺跡博物館及び文化活動協会の協力のもとアンコンの北隣に位置するチャンカイ谷海岸部のパサマヨ遺跡でも発掘を実施し、簡易な調査報

告書を出版した[Vidal 1969]。出土遺物は、現在、アンコン遺跡博物館で保管されている。

1969 年から翌年までは、ウンベルト・ゲルシ（Humberto Ghersi）とロレンソ・サマニエゴ（Lorenzo Samaniego）が、アンコン市街で発掘調査を実施した。1970 年には、アルベルト・ミジェール（Alberto Miller）が発掘調査を行った。出土遺物の分析に基づいて、博士論文「アンコン・タンク遺跡における先史時代の経済について：ペルー中央海岸部アンコンとチジョン地域における農業の開始に関する人口学的解釈についての一試論（Economic Prehistory at the Ancón Tank Site: A Test of Demographic Explanation of Agricultural Origins in the Ancón – Chillón Region, Central Peruvian Coast）」を執筆した[Miller 1986]。1976 年には、ペルー文化庁の指導のもと、ラビーネスが発掘調査を行い、12 基の墓を発見した。1978 年、ラビーネスたちは、後期ホライズンのファルド（ミイラ包み）[註2] の構造やファルド内の副葬品について紹介した[Ravines and Stothert 1978]。さらに、ラビーネスは、中期ホライズンから後期中間期の埋葬コンテクストの特徴についても論文にまとめた[Ravines 1977, 1981]。

1994 年 1 月から同年の 2 月には、アンコン考古学調査センターとリマ大学が、フェデリコ・カウフマン・ドイグ（Federico Kauffmann Doig）の指揮のもと、考古学プロジェクト「アンコンの墓群調査」を実施した。カウフマンたちは、20 基の墓を発見し、そこで 31 体の被葬者を確認した。発掘調査の成果は、ペルーの考古学雑誌『アルケオロヒカス 23 号（*Arqueológicas* Nº23）』で公表された[Kauffmann 1996]。1997 年には、ピーター・カウリケ（Peter Kaulicke）がアンコンの墓とその構造、被葬者の扱いや副葬品などについてまとめた本をスペイン語で出版し[Kaulicke 1997]、ラファエル・セグラ（Rafael Segura）が、1946 年から 1949 年までに発掘された資料に基づいて、中期ホライズン末における埋葬コンテクストの復元を試みた[Segura 1997]。

2000 年には、セルヒオ・バラサ（Sergio Barraza）が、アンコン沿岸部でストゥーメルが発掘した前期中間期（リマ文化）の墓や出土遺物について再検討を行った[Barraza 2000]。また、マーガレット・ヤング・サンチェス（Margaret Young-Sánchez）は、ライスとストゥーベルが 19 世紀に発掘した織物のコレクションを調査・研究し、博士論文にまとめた[Young-Sánchez 2000]。近年では、ペルー国立考古学人類学歴史学博物館に保管されている、アンコン出土の金属器の分析とその出土状況の復元を試みた研究報告がある[Castro de la Mata and Inés 2009]。

今日まで、アンコンにおける発掘調査で 3000 基以上もの墓が確認されてきた。しかし、その調査成果は一部が公表されたにすぎない。加えて、出土遺物は、ペルー国内外に散在し、未調査のものが数多くある。今後はペルー国内及び海外に散在した遺物のデータを総合し、調査・研究していくことが不可欠である。

## 4. アンコン遺跡博物館及び考古学調査センターの歴史

1967 年に、歴史学者アレハンドロ・ミロ=ケサーダ・ガルランド（Alejandro Miró Quesada Garland）と技師オラシオ・アルベルティ・ニコリニ（Horacio Alberti Nicolini）が中心になって、アンコン遺跡博物館及び文化活動協会（以下、アンコン協会）を創立した。その目的は、アンコンで出土した重要な遺物を保管・展示する遺跡博物館を建設することであった。

長年、資金不足により遺跡博物館の建設は実現されなかったが、1992 年、リマ美術博物館とアンコン協会の間で協定が結ばれた。この協定に従い、1993 年に、アンコン遺跡博物館が建設された。

同年には、アンコン協会は、館長にフスト・カセレス（Justo Cáceres）を迎え、常設展示室を開設した。現在まで、カセレスがアンコン遺跡博物館の管理・運営を務めている。

1993 年のアンコン遺跡博物館建設にあわせて、遺跡や遺物の調査・研究を担う考古学調査センターも設置された。初代ディレクターにカウフマンが就任し、1996 年頃まで、その職を務めた。その後、2008 年までディレクターが不在となり、アンコン考古学調査センターは活動を停止した。

2006 年に、アンコン遺跡博物館の常設展示室で「アメリカ大陸最古カラルースーペ文明」を紹介することを目的に、カラルースーペ考古学特殊プロジェクトとアンコン協会の間で協定が結ばれた。現在も常設展示室の一画に、カラル遺跡の模型が展示されている。

2008 年に、アンコン協会会長に、協会創設者の一人アレハンドロ・ミロ=ケサーダ・ガルランドの子息ガブリエル・ミロ=ケサーダ（Gabriel Miró Quesada）が就任した。彼はアンコン考古学調査センターを再始動し、2009 年には、40 年にわたってアンコンで保管されてきた遺物[註3]のデジタルカタログ化と保存事業を始めた。開始するにあたりミロ＝ケサーダは、ルシア・ワトソン・ヒメネス（Lucía Watson Jiménez）を考古学調査センターの二代目ディレクターに迎え、現在まで事業を継続している。

## 5. 文化財事業について

現在、アンコン考古学調査センターが行っている主要な事業は以下の３つである。

1）デジタルカタログの作成とホームページ上での公開

2）ファルド（ミイラ包み）の保存作業

3）フリオ・C・テーヨ野外調査ノートの翻刻及び図版の写真記録

### 5. 1. デジタルカタログについて

アンコン遺跡博物館が保管する遺物は、1960 年以降に、アンコンとチャンカイ（ハサマヨ遺跡）で出土したものが主体である。一部、アンコン市民からの寄贈品も含まれる。

2009 年 1 月以降、現在まで遺物のデジタルカタログ化を継続している。2011 年 9 月までに作成し終えたデジタルカタログは、土器、石器、織物、金属器、木製品、マテ製品、人骨、貝殻製品に分類され、アンコン遺跡博物館のホームページで紹介されている（http://www.museodeancon.com/）[註4]。

各遺物の概要は以下のようになっている。遺物の点数は、2011 年 10 月現在のものである。

#### 土器

アンコン遺跡博物館が保管する土器は、形成期から後期ホライズン（インカ期）までのものがある。その多くは後期中間期の土器である。カウフマンの発掘調査で出土した中期ホライズンの土器も保管されている（図 3）。ホームページ上では、土器 1254 点が紹介されている。

#### 石器

アンコン遺跡博物館に所蔵されている石器には、石臼、紡錘車、石斧、石錘、武器形石製品などがある。また、未製品も保管されている。先土器期や後期中間期のものが多い。デジタルカタログ

には、83 点が紹介されている（図 4）。

織物

アンコンでは、後期中間期に発展する重要な工芸の一つである。綴れ織、羅、レースなどの織物がある。貫頭衣、褌、帯、人形、漁網など多様な製品がある。手描き染めや刺繍をもつ布もある。ホームページ上では、202 点の織物が紹介されている（図 5）。現在もアンコン遺跡博物館には、未調査の織物が多く保管されており、記録と保存作業を継続している。

金属器

アンコン遺跡博物館が保管する金属器は、仮面、ペンダント、胸飾り、留めピン、針など、実用的な製品から儀礼用の装身具まで多様性に富んでいる。ホームページでは、後期中間期の金属器を中心に 61 点が紹介されている（図 6）。

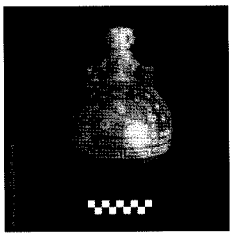

図 3　中期ホライズンの土器

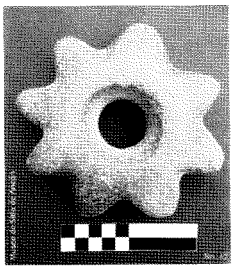

図 4　石器の一例

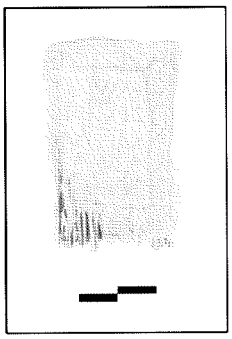

図 5　織物の一例

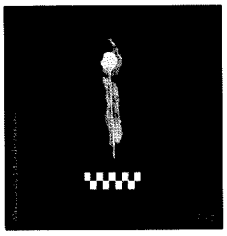

図 6　金属器の一例

木製品

デジタルカタログに紹介されている木製品は 324 点である。木製品の多くが後期中間期のものである。織物製作に使われた道具が多く、開口棒（ロッド）、紡錘車、櫛形道具などがある。「浮き（flotadores）」と呼ばれる、円錐状の形をした木製品も数多く紹介されているが、本来の機能は不明である。また、儀礼で用いられたケロ（酒器）、耳飾、鏡受などもホームページで紹介されている（図 7）。

マテ製品

ホームページ上では 131 点のマテ製品が紹介されている。後期中間期のものが多い。マテは、ウリ科（*Lagenaria* sp.）の植物であり、その実を加工して容器が製作された。主な器種は、鉢と皿である。蓋付き鉢もみられる。蓋の有無に関わらず、鉢や皿の容器内には、石灰が付着していたり、植物遺存体、貝殻片などが残されていることがある。修理跡をもつ製品もみられる。また、外面に焼画の図像や幾何学文様をもつ容器も数多く保管されている（図 8）。

人骨

デジタルカタログでは、200 体を超える後期中間期の被葬者の人骨とカウフマンの発掘で出土し

た中期ホライズンの 31 体の人骨が紹介されている（図 9）。研究者の関心に応じて、ウェブ上で人骨の特徴が検索できるよう配慮されている。

貝殻製品

アンコンでも貝は食糧として、また経済的・象徴的価値をもった資源として利用されてきた。アンコン遺跡博物館には、ウミギク貝（*Spondylus*）製の首飾りなどが保管されている。ホームページ上では、中期ホライズンから後期中間期の貝殻・貝殻製品 121 点が紹介されている（図 10）。

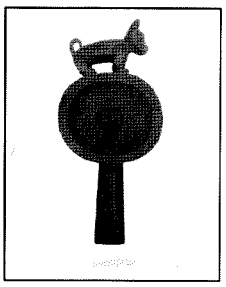

図 7　木製品の一例

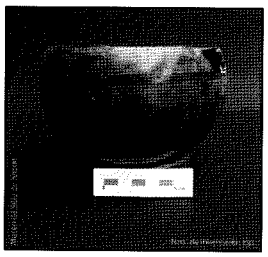

図 8　マテ製品の一例

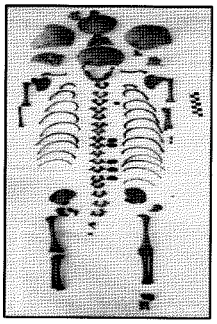

図 9　人骨の一例

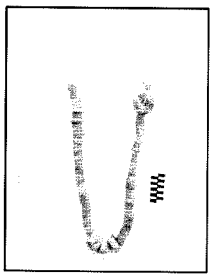

図 10　貝製品の一例

5．2．ファルド（ミイラ包み）の保存作業

アンコンで 40 年にわたって保管されてきた、65 点のファルド（ミイラ包み）の予備的保存作業を、2009 年 7 月以降に実施している。保存作業が主な目的ではあるが、作業の過程で得られる情報（ファルドの型式、構造、ファルド内の副葬品など）についても記録している。

5．3．フリオ･C･テーヨ野外調査ノートの翻刻及び図版の写真記録

ペルー国立考古学人類学歴史学博物館には、フリオ･C･テーヨやサン・マルコス大学の考古学者たちが残した野外調査ノートが数多く保管されている。その野外調査ノートの翻刻を 2010 年 6 月に開始し、2011 年 10 月まで実施した。また、多くの手描き図版も残されており、デジタルカメラを用いて記録する作業を、2011 年 4 月から同年 10 月まで行った。これらの作業によって未公表の埋葬コンテクストを復元することができる。

さらに、野外調査ノートには、アンコンでの考古学緊急調査がどのような社会的状況で実施されたか（考古学者たちと開発事業者たちとの対立関係など）も記録されており、考古学以外でも貴重な情報が残されている。

## 6．アンコン考古学調査センターの役割について

6．1．専門家間の交流促進の試み

ホームページでのデジタルカタログ公開以降、様々な専門家がアンコン遺跡博物館で調査を実施した。デジタルカタログの利用によって、研究者は充実した事前調査と、現地でのデータ採取を円

滑に行うことができる。

例えば、2010 年 11 月には、オーストラリアのアデレード大学に在籍するバスティアン・ラマス（Bastian Llamas）が、デジタルカタログに従って古人骨を選定し、DNA 分析のため試料採取を実施した（図 11）。同年には、メキシコのテンプロ・マヨール博物館研究員エミリアーノ・メルガル（Emiliano Melgar）が、デジタルカタログを利用して、分析対象となる貝殻製品を選定し、アンコンでペルー人考古学者たちと共同調査を行った（図 12）。また、アメリカやカナダの大学院で博士課程に在籍する研究者が論文作成を目的に、デジタルカタログにおいて紹介されている人骨の調査を実施した。

勿論、アンコン遺跡博物館に保管されている遺物は、アンコンで出土したものの一部でしかない。出土遺物の多くは、ペルー国立考古学人類学歴史学博物館、アメリカのフィールド博物館、ドイツのベルリン博物館など、ペルー国内外に分散して保管されている。そのため、アンコン考古学調査センターは、デジタルカタログの作成を契機にして、他の博物館とアンコンの遺物に関する情報交換を開始した。2010 年には、ベルリン博物館から、アンコンの出土遺物をまとめたリストが、アンコン考古学調査センターへ提供された。同年には、ペルー国立考古学人類学歴史学博物館からも遺物に関する情報提供を得た。

2009 年以降、アンコン考古学調査センターが実施してきた活動と成果については、ディレクターのワトソンが中心となってペルー国内外でのシンポジウムで報告しており、研究者たちと交流を図ってきた。

フィールド・スクールも 2011 年 7 月・8 月に、アメリカ大使館の支援を受けて実施された。米国の大学院修士課程に在籍する二名の学生が、展示デザインの改善やファルド（ミイラ包み）の予備的保存作業を行った。

アンコン遺跡博物館において専門家間の交流や共同研究などを促進する機会が増え始めている。

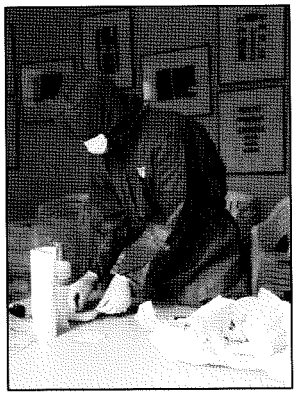

図 11　古人骨からの試料の採取

図 12　貝製品の共同観察

## 6. 2. アンコン市民との交流促進の試み

2009 年以前から、アンコン遺跡博物館では、市民交流のため伝統舞踊会や絵画教室が実施されてきた。2009 年と 2010 年には、アンコン考古学調査センターが子ども考古学教室を開催した。

アンコンは2009年を境にして、一つの大きな社会問題に直面している。アンコンの沿岸部に大規模港湾の建設計画が持ち上がったのである。アンコン区役所は、在地の伝統的漁撈文化とそれに従事する人々の生活を保護するために、港湾建設反対の声明を発表した[Empresa Editora El Comercio 2010]。今後、アンコンの港建設と文化財保護の問題は、関係性を高めていくと考えられる。2011年7月に大規模港湾建設の一時凍結が表明されたが、建設を支持する人たちも多く、今後の行方に注目があつまっている。

このような社会問題に直面しているアンコンのなかで、アンコン考古学調査センターが果たす役割は一層重要になっていくだろう。現在、常設展示室に漁撈文化をテーマにしたコーナーが設けられ、その重要性が紹介されている。2011年8月に、アンコン考古学調査センターは、20世紀後半以降のアンコンにおける漁撈文化の保存を目的に漁民たちへのインタビューを実施した。

文化財保護には、考古学者だけではなく、様々な専門家や市民たちの交流を支えるネットワークが必要である。そのネットワーク形成をアンコン考古学調査センターが担っている。そして、アンコン遺跡博物館は、交流の場を提供している。

## 7. 結びに

地方博物館は、貴重な遺物を多く保管しながらも、情報発信されていないこと、博物館そのものへのアクセスも容易ではないケースもあるため、その役割を十分に果たしているとは言えない現状がある。

しかし、アンコン考古学調査センターによるデジタルカタログの作成とホームページ上での公開以降、アンコン遺跡博物館において、ペルー国内外の様々な研究者による調査が実施された。また、アンコン市民との交流も図られてきた。今後もアンコン遺跡博物館において人々の交流を促進・継続させていくことが重要である。

註

（註 1）フィールド・スクールとは、海外から学生を迎えて行う、野外や博物館での実習プログラムのことである。

（註 2）ペルーの先スペイン期では、墓に埋葬する被葬者を幾重にも織物で包む例がある。その包みをファルド（Fardo）と呼称している。

（註 3）アンコン遺跡博物館建設以前に発掘された遺物の一部が、アンコン協会所有の倉庫で保管されてきた。

（註 4）ホームページでのデジタルカタログ公開の先行例として、リマ市のラルコ博物館の実践がある。しかし、リマ市を離れた地方博物館では、アンコン遺跡博物館の実践が最初となる。

# 参考文献


Barraza, S.

2000 Las excavaciones de Louis Stumer en Playa Grande (1952): Una aproximación a las prácticas funerarias Lima. *Boletín del Instituto Riva-Agüero* 27: 25-76.

Bonavia, D.

1962 Sobre el estilo Teatino. *Revista del Museo Nacional* 31: 43-94.

Carrión Cachot, R.

1948 La Cultura Chavín. Dos nuevas colonias: Kuntur Wasi y Ancón. *Revista del Museo Nacional de Antropología y Arqueología* 2(1): 99-172.

1951 *Ancón. Elementos culturales de tres épocas hallados en las necrópolis de Ancón. Tercera Exposición Especial de San Marcos de Lima 1551-1951.* Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Lima.

Castro de la Mata, P. and M. Inés Velarde

2009 Contextualización y análisis tecnológico de las piezas de metal del sitio arqueológico Ancón. *Arqueología y Sociedad* 20: 149-180.

Dorsey, G. A.

1894 An Archaeological Study Based on a Personal Exploration of Over One Hundred Graves at the Necropolis of Ancón, Peru. PhD Dissertation, Harvard University.

Empresa Editora El Comercio

2010 Consejo de Ancón se opone a la construcción de puerto en su bahía. In *El Comercio.pe*. Retrieved from http://elcomercio.pe/lima/661064/noticia-concejo-ancon-se-opone-construccion-puerto-su-bahia_1.

Frame, M., D. Guerrero, M. Vega, and P. Landa

2004 Un fardo funerario del Horizonte Tardío del sitio Rinconada Alta, valle del Rimac. *Boletín del Instituto Francés de Estudios Andinos* 33(3): 815-860.

Fung, R., C. F. Cenzano, and A. Zavaleta

1972 El Taller Lítico de Chivateros, valle de Chillón. *Revista del Museo Nacional* 38: 61-73.

Huapaya, C. M.

1948 Nuevo tipo de tumba descubierto en las Necrópolis de Ancón. *Revista del Museo Nacional de Antropología y Arqueología* 2(1): 93-98.

Kauffmann Doig, F.

1996 Proyecto Arqueológico Tumbas de Ancón (I). *Arqueológicas* 23: 1-167.

Kaulicke, P.

1997 *Contextos funerarios de Ancón. Esbozo de una síntesis analítica.* Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.

Lanning, E. P.

1963 An early ceramic style from Ancón, Central Coast of Peru. *Ñawpa Pacha* 1: 47-59.

1964 Las culturas precerámicas de la costa central del Perú. *Revista del Museo Nacional* 33: 408-415.

1967 *Peru before the Incas*. Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, New Jersey.

Matos, M. R.

1962 *La Cerámica Temprana de Ancón y sus problemas*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Lima.

1966 El Período Cerámico Inicial en la costa central del Perú. *XXXVI Congreso Internacional de Americanistas/Actas y Memorias* 1: 506-518.

Miller, A.

1986 Economic Prehistory at the Ancón Tank Site: A Test of Demographic Explanation of Agricultural Origins in The Ancón – Chillón Region, Central Peruvian Coast. PhD Dissertation, State University of New York.

Moseley, M. E.

1968 Changing Subsistence Patterns: Late Preceramic Archaeology of the Central Peruvian Coast. PhD Dissertation, Department of Anthropology, Harvard University.

1975 *The Maritime Foundations of Andean Civilization.* Cummings Publishing Company, Menlo Park, California.

Muelle, J. C. and R. Ravines

1974 Los estratos precerámicos de Ancón. *Revista del Museo Nacional* 39: 49-70

Patterson, T. C.

1966 *Pattern and process in the Early Intermediate Period Pottery of the Central Coast of Peru.* University of California Press, Berkeley and Los Angeles.

Patterson, T. C. and E. P. Lannnig

1964 Changing settlement patterns on the central Peruvian coast. *Ñawpa Pacha* 2: 113-123.

Ravines, R.

1977 Prácticas funerarias en Ancón (Primera parte). *Revista del Museo Nacional* 43: 327-396.

1981 Prácticas funerarias en Ancón (Segunda parte). *Revista del Museo Nacional* 45: 89-166.

Ravines, R. and K. Stothert

1978 Un entierro común del Horizonte Tardío en la Costa Central del Perú. *Revista del Museo Nacional* 42: 153-205.

Reiss, W. and A. Stübel

1880-87 *Das Todtenfeld von Ancón in Peru. Ein Beitrag zur Kenntnis der Kultur und Industrie des Inca-Reiches. Nach Ergebnisen eigener Ausgrabungen* 3 vols. A. Asher, Berlin.

Rosas L. N., H.

2007 *La secuencia cultural del período Formativo en Ancón*. Avqi Ediciones, Lima.

Segura, R.

1997 Los contextos funerarios de fines del Horizonte Medio en la necrópolis de Ancón. *Boletín de Arqueología PUCP* 1: 241-252.

Strong, W. D.

1925 The Uhle Pottery Collections from Ancon. *American Archaeology and Ethnology*. 21(4): 135-190.

Stumer, L. M.

1953 Playa Grande: Primitive Elegance in Pre-Tiahuanaco Peru. *Archaeology* 6(1): 42-48.

1954a The Chillón Valley of Peru. Excavation and Reconnaissance (Part 1). *Archaeology* 7(3): 171-178.

1954b The Chillón Valley of Peru. Excavation and Reconnaissance (Part 2). *Archaeology* 7(4): 220-228.

1955 History of a Dig. *Scientific American* 192 (3): 98-104.

1961 A Radiocarbon Date from the Central Coast of Peru. *American Antiquity* 20(2): 130-148.

Tabío, E. E.

1957 Excavaciones en Playa Grande, Costa Central del Perú, 1955. *Arqueológicas* 1(1). Museo Nacional de Antropología y Arqueología, Lima.

Uhle, M.

1913 Die Muschelhüegel von Ancón. *International Congress of Americanists. Proceedings of the XVIII Session (1912)* 1: 22-45.

Vilda, H.

1969 *Excavaciones arqueológicas en Pasamayo.* Patronato del Museo de Sitio y Actividades culturales de Ancón, Lima.

Willey, G. R.

1943 A Supplement to the Pottery Sequence at Ancon. In *Archaeological Studies in Peru, 1941-1942*, edited by W. D. Strong, G. R. Willey and J. M. Corbett, pp. 201-222. Columbian University Press, New York.

1948 A Functional Analysis of "Horizon Styles" in Peruvian Archaeology, In *A Reappraisal of Peruvian Archaeology*. pp. 8-15. Society for American Archaeology Institute of Andean Research, Menasha.

Young-Sánchez, M.

2000 *Textiles from Peru's Central Coast 750-1100: The Reiss and Stübel Collection from Ancón.* Columbia University, New York.